平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園
２０１８年 6月号

「忘れられる幸せ」

牧師・園長　長村亮介

私はカルヴァンの「キリスト教綱要」がたいへん好きで、毎朝半ページか一ページぐらいずつ読みます。ラテン語で。その中にこういうことが書いてあります。あの「主の祈り」の一節、「我らが人に赦すごとく我らの罪をも許し給え」というところの注釈です。神に罪を赦して欲しいと願うことは、わかるのです。けれども「我らの人に赦すごとく」といっていることについて、カルヴァンは次のように言うのです。私たちは神ではない、それなのに人の罪を赦す権利があるのだろうかと。

電車の中で間違って足を踏んで、ごめんなさいというぐらいは言えます。しかしほんとうの意味で人の罪を、我々は赦すことができるのだろうか。そのときカルヴァンは、主の祈りのその個所をわかり易い言葉で言えば、けっきょく人が私たちに対して犯した罪を、私たちは神ではないから赦す資格はない、私たちも罪人だから。赦すことができるのは神だけである。だから聖書に書かれている意味は、私たちは人の罪を忘れなさい、ということだというのです。

「忘れる」という文章を読みますと、無責任なようにも考えます。人から悪いことをされて、それを忘れろとは何事だと。けれどもそれしか人間にはすることができないのです。

これは非常に深い真理だと思うのです。神は私たちの罪を赦してくださる。それに対して私たちは、人の罪を赦す資格を持っていない以上、人の罪を忘れる、いちばん軽薄でない意味において、人の罪を忘れるしかないのです。忘れたと言いながら、おなかの底で怒っているようでは駄目なので、ほんとうに忘れなくてはいけないのです。それが出来たときに初めて、神は私たちの罪を赦してくださる。

このキリストの福音こそが、死をもって終わる人間の経験に、尽きざる新しさを与えるところのものです。つまりたえず経験が信仰に養われるときに、その経験はどこまでも深まって行くことができます。死がそこに来ても、その死を安らかに迎えることができます。信仰は、そうした可能性の根拠であると思います。

……（略）……

キリストにおける罪の問題、十字架における罪の贖いと赦し、私たちがそこに対して唯一なすべき業としての、人の罪を忘れるということ、それからさらに復活を待ち望むということ、これは私が経験という問題と真剣に取り組み始めた最初から考えますと、いかにも縁遠い、他の世界の問題のように見えますけれども、けっきょくすべての経験は、死と罪の問題を通して、そこへ行ってしまうことに気づきました。

（『いかに生きるか』森 有正）

引用しましたのは昭和四十五年に出されたこの対談録の最後のところなので、明治の時代に牧師の子として生まれた森 有正が哲学者、キリスト教学者として、「いかに生きるか」を問いつづけた生涯の、その一つの帰結とも言えるのではないかと思います。

人間は歳を重ね、経験をすることによって、一日く成熟して行きます。そしてその時までに行き着いた経験をもって、人間は死を迎えるのだと森 有正は言います。聞きようによっては、人間は死ぬために生きているようにも聞こえますが、そうではなくて、人生をほんとうに平安のうちに終えるために、それが私たちに出来る唯一のことなのだと彼は言っているようです。

人を赦すということはとても難しいし、実は人間にはそのような資格もないと言うのです。しかし、そうかと言って忘れるというのも簡単ではないと思います。ただ心の底に怒りや恨みを抱えたままでは幸せにこの人生を終えることができないというのもよく分かります。それと、もしできることなら自分の罪も忘れて貰うために、人に赦しを請うことも大切なのかも知れません。神さまは赦して下さるとしても、人の怒りを負ったままではそれも良い人生にはなれないように思います。ただ、赦していただくということも簡単なことではないでしょう。そのようなことは、健康で強気で過ごせる時はあまり考えないことなのかも知れませんが、罪や死の問題は人生の澱のように知らないうちに心の底にたまるものなのかも知れません。しかしそれは葡萄酒ではありませんが、その澱こそに人生の成熟の証拠があって、時に病や思いがけない出来事によって自分が弱くされた時に、決して心地よいことではありませんが、私たちが生きた証として、そこに見出すことがあるのでしょう。

子どもたちには、体の健康や成長も大切ですが、心の成長の糧になる滋味ある本も読んで上げたいと思います。Ω